

魅せられて綴る藩文学 (十三)

藩学「四教室」と先哲

勝間田 三千夫

(会員 佐伯市中村北町)

歸塾。

二十一日 孫子卒業。使益多開吳子講。

二十六日 改月旦評。益多加七級上。謙吉加五級上。

文政三年五月二十五日、七級下に昇級して一年、いま、大極地といわれる七級上位に昇進した。

晦日 赴森成策招。益多。无爲。研介従焉。

同座。館林清記。京屋四郎兵衛。鍋屋

藤右衛門。日暮歸家。

六月 四日 尚書卒業。使益多開司馬法講。是日招

丸屋幸右衛門於東塾。供酒及飯。久兵

衛。益多陪客。夜二更後散。

十一日 放學。

十二日 雷雨。是日。江戸書到府。傳府君有趨

擢之命云。職任西國筋御郡代。格布衣。

祿百石。朝服往賀。遂宴延中。諸僚屬。

及市人出入府者。凡四五十人。宴畢。

遍到僚屬家賀。三更歸家。(中略)

使益多講長短説。

塩谷大四郎正義は、始御勘定吟味方改役についた。寛

屯、姓名を改め延谷梅亭とした。益多とは塾舎で寝起

を共にした仲で、二月二十九日玖珠郡小田村醫人延谷梅

芳の養子となり、在籍六年を以て惜別した人であった。

十五日 虚白。久市來訪。清記亦來。使益多。

宇次郎迎。會於東塾。至暮而散。

二十四日 赴才田會。益多。宇次郎。頼母従焉。

座客。釋玄海。虚白。惠禅。三松静壽。

頼之。館林清記。佐藤玄猷。日入而歸。

二十七日 胸惡頭痛。頻瀉。服醫藥休講。益多之

天瀨。

五月 朔 以病未癒。不敢出賀。使益多開孫子講。

二日 福二以疾歸郷。大洞送之。益多。隼人

政十二年三月代官に任命され、丹後但馬国五萬石の幕府領の支配を命ぜられ、役高百五十俵を給されるなど、代官・郡代という地方官僚への道を歩むことになった。文化十三年、九州の幕府領十萬石の支配を命ぜられ、翌年の十月、代官として日田の陣屋に着任した。それから五年、文政四年五月江戸において、將軍家齊に御目見得した際、布衣五百俵高をもって、西国郡代に命ぜられたのである。(徳川実紀)

十六日 矢野鼎來訪。日夕呼益多小酌。

二十四日 招益多。專一。小酌。兒玉亦會至。

宇次郎改め專一と稱す。

(四) 筑肥遊学

六月二十五日 益多遊筑後肥前。

去年の春筑前より帰り、塾政を執つて約一年半、今再び遊学することとなった。

宜園学則最上位七級上に昇進した益多には、もはや常課はなかった。淡窓は、やがて来るであろう益多との別れを知っていた。その為に備え、諸国遊学の第一歩として、筑肥に遊ばせようとしたのであるが、これが愛弟子にて

きる最後の饒けかと思えば、なにか心を動かされるものがあった。塾政は為に、その間專一(宇次郎)と研介が更る更る執ることになった。

益多は、是日日田を出発して、まず筑後に會て宜園に席を同じくした重富叔容を訪ねて、当家に暫く滞在した。その後、久留米・佐賀を経遊し、長崎に着いた時は十月中の頃であった。かの地に村尾三右衛門を訪ね、暫く留宿することとした。当家は、嘗て淡窓が長崎に遊んだとき留宿した名家であり、この度益多が遊学するに当たって、予て紹介されていた家である。

支那及び遠西文化の侵入する門戸は、長崎であることは言うまでもない。支那より輸入される文献の数々は、長崎の港に入り、競つて購求されていた。諸侯は、唐本の購求に熱心であった。鎖国時代でも日本にとつて、書籍を輸入することは、外国文化を知る上に貴重な財産となっていた。これら唐本は、直ちに幕府や諸侯などの文庫に入るのみならず、長崎の読書子に玩賞されていた。

もっとも書籍は、当時輸入品目の外であったが、積荷

の中に積載されて入港していた。しかし荷揚げされず、必要に応じ支那文人が一緒に乗船して儒教本国の講釈がなされていた。それを聞くことが榮譽とされていただけに、日本の儒者たちは進んで長崎に見聞することがならわしのようになり、遊学した頼山陽も、西遊して三月も長崎に滞在している。

是より先、林羅山をはじめ、三浦梅園・亀井南溟・古賀穀堂・田能村竹田等屈指の碩学が遊学して、その榮を受けている。広瀬淡窓も例外ではなく遊んでいる。この度の益多遊学も、この唐風を研学させるためだったのである。今一つ憶説すれば、淡窓が五子の詩に曰っているように、益多は池塘に棲み老ゆ人材ではない。翼を成長させ、必ずや大海に住む南溟の鳥となるであらうことを、その為には、長崎で支那の文人たちとの交流を深めることが大切であることを知っていた。

この頃、日田では佐伯より淡窓のもとに一通の書状が届いていた。それは、益多の父幹右衛門からであった。君命により、帰国せよと言うのである。淡窓は君命ならばと、その日（十月七日）書を認め、迎への使者を発て

た。淡窓はこの君命の書状に接した時、早や予感が的中したことを知ったのである。

それから十三日後、益多は遊学途上四ヶ月にして塾に帰った。

文政四年

十月 晦日 益多歸塾。

十一月 朔 招益多飲于上。

七日 招益多飲西塾。

(五) 益多大歸

十日 夜益多告別小飲。

十一日 益多歸郷。大歸也。内外生徒送者。六

七十人。放學。

去る十月十七日「發迎益多使及書。」より今に至る二十有餘日、淡窓の心に和む日とてなかつた。名残を惜しみ、盃を再三再四と汲みかわし乍らも、如何とも仕方なく、ただ無情の時だけが流れ、愈々益多大歸の日、淡窓は塾を放學して惜別した。また餞送の塾生も六七十人と、益多が宜園に比類なき人材なれば、送者もまた嘗てない人

数であった。「餞送之盛ナルハ、從來未ダ有ラザルナリ。」
と言っている。また「及其歸也。有易東之歎」と言っ
ているように、これが君命による帰郷を知らない淡窓では
なかった。

雪解けの中に土は緩み漸く春の顔が覗くころ、益多十
六歳で入門して六年、宜園の厳しい学則に耐え、甘んじ
て研学に勉勵の甲斐あつて、不可能ともいわれた月旦評
七級上という最上位に昇進した。この事は名実共に宜園
第一の地位であり、その俊才ぶりが淡窓第一の高弟をな
したのである。淡窓は懐旧して「其人材予ガ門ニオイテ
第一ナリ」と。

咸宜園の「休道」の精神に甘んじ、衣鉢相伝ともいう
べき学説「敬天」思想の教導を、高く評価するのである。

淡窓の在るところ益多必ず在った。益多が淡窓の左右
の手となり足となつて、塾政を執つてきたことは日歴に
見ての通りである。

淡窓の心中には一抹の淋しさこそ残れ、これ以上授け
る常課もなく、寧ろ大海に遊んで一層の研学を積まれる
ことを期待してやまなかつたが、惜別の情はかくせな
かつた。小成して筑前に遊び、再び池（宜園）の堤にや

すんで翼を養い、いまその成長あつて、將に飛びたたん
とする南溟の鳥に、大きく期待するのであつた。

また淡窓は、後年に至り「この」人材が大成したなら
ば、誰もこの中郎に対抗し得るものはなからう。千里を
駆ける駿馬ともいふべき子玉、之を鞭打ち訓練する王良
の如き名手が欲しいものだ。」と言っているが、名手は淡
窓をおいて外にはなかつた。壁辺の地に静座していても、
諸国を往來する儒者・文人・書畫家に至るまで、その動
静が手に取るように入り、諸報があとをたたなかつた事
を、その著書に見ることができからである。

今宜園を終学して故郷に帰る益多には、この時から文
政五年江戸に遊学するまで、藩校「四教堂」に子弟を教
導し、余暇には近郊を散策したりして詩を練り、江戸遊
学にそなえていた。この時の作と思われる詩が「龍川舟
遊」七首におさめられている。（別記）

つづく